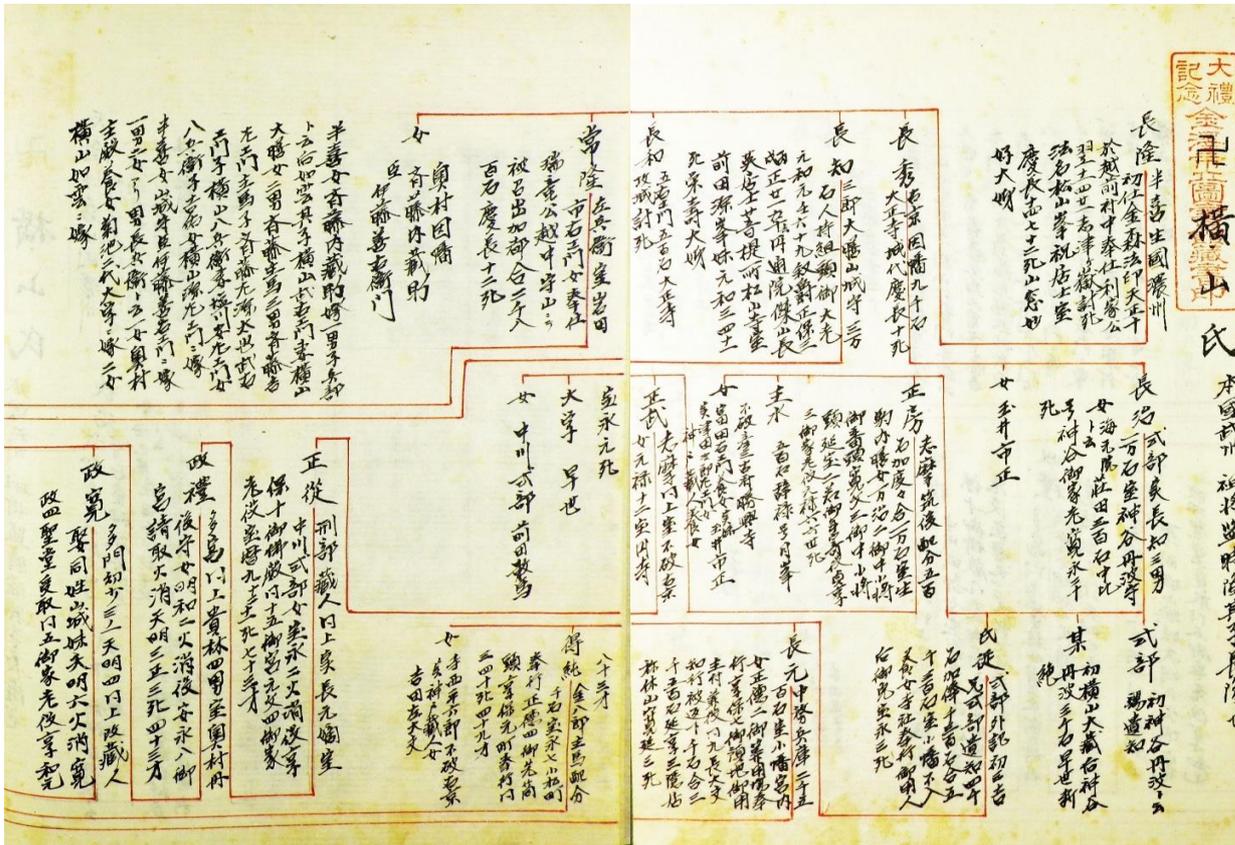
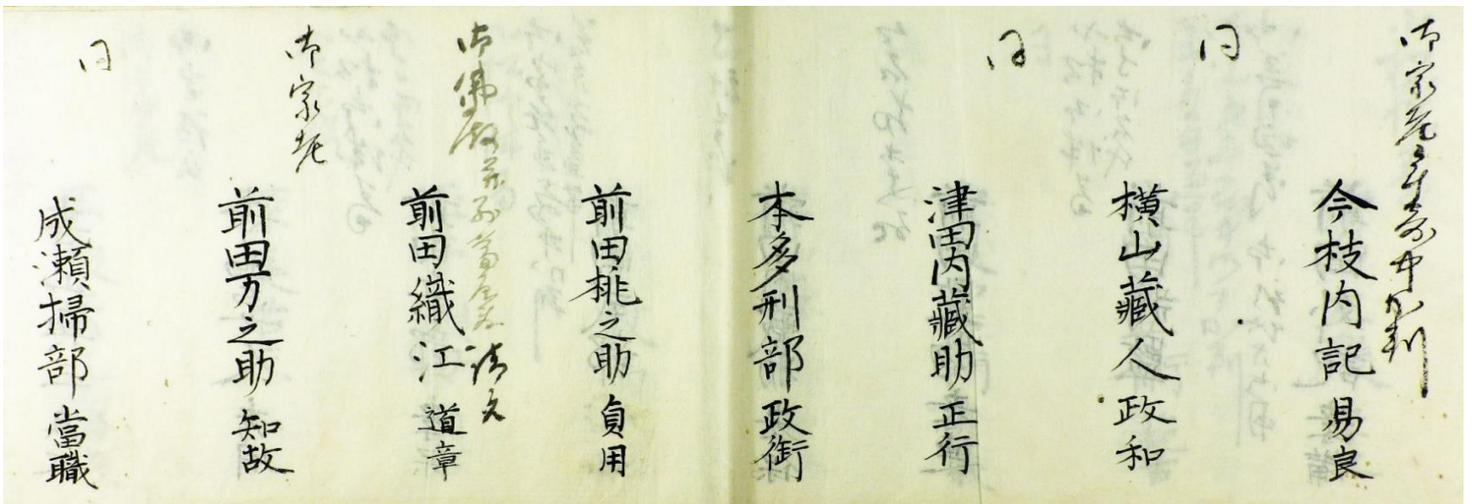


# 家山横組持人石万



諸士系譜 (090-836®)

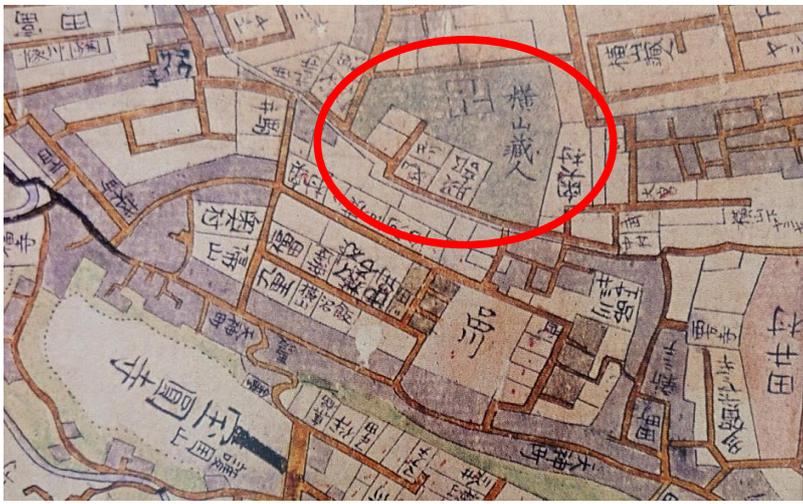


人持交名覚書(仮368)

令和6年2月6日(火)～4月7日(日)

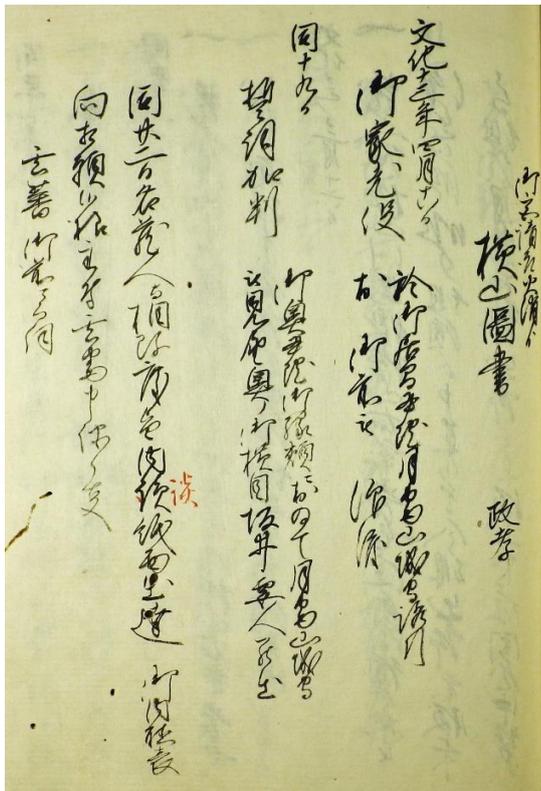
金沢市立玉川図書館 近世史料館





金沢町絵図(明治初年)(大1023)部分

弘化末期とされる「士帳」(16.30-55)では、1万石の人持として「横山政次郎(政和)」の名があり、田町に居住、菩提寺は献珠寺、家紋は「角ノ内万字」とある。

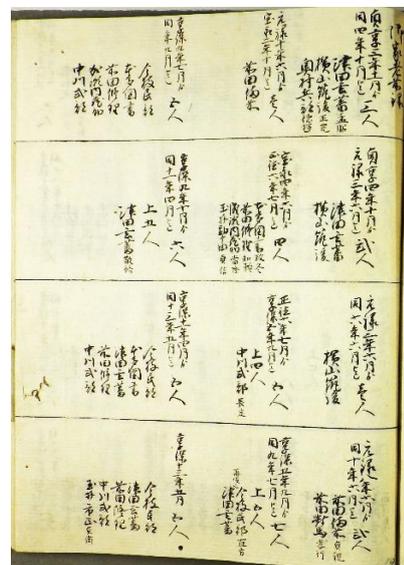
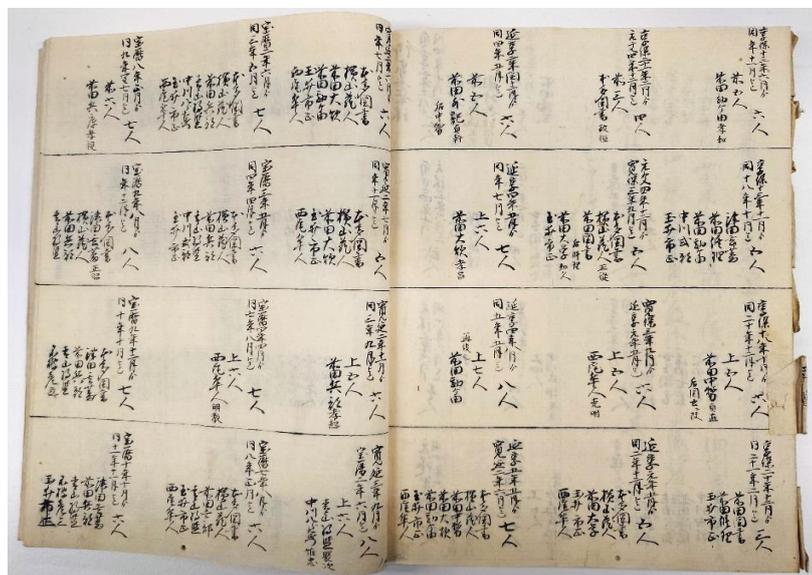


御家老若年寄前録(16.26-85①)

横山政孝は、享和元年(1801)に召し出されると、定火消役やその他請取火消を勤め、文化13年(1816)4月に家老役、その後年寄中席御用加判を仰せ付けられている。翌年に江戸詰を命じられると、文政2年(1819)、同9年にも江戸に向かっている。

そして、同11年には勝手方御用を命じられ、さらに天保元年(1830)末に江戸詰を命じられた際、藩主前田斉泰の嫡男慶寧の部屋住中御用主附となっている。

天保3年にも江戸詰を命じられたものの、体調不良により山中へ湯治に向かい、遅れて江戸に入っている。そしてまたも同6年に命じられた江戸詰のさなか、翌7年正月26日、体調の悪化により江戸で死去している。政孝の遺体については茶毘に付すことなく金沢に運ばれており、跡を継いだ政和は、まだ3歳の子どもであった。



御家老若年寄前録(16.26-85⑤)

この史料では、貞享3年(1686)11月から文久3年(1863)2月までの家老就任者を年表のように整理しており、冒頭の貞享3年には「津田玄蕃孟昭、横山筑後正完、奥村兵部徳輝」と記されている。

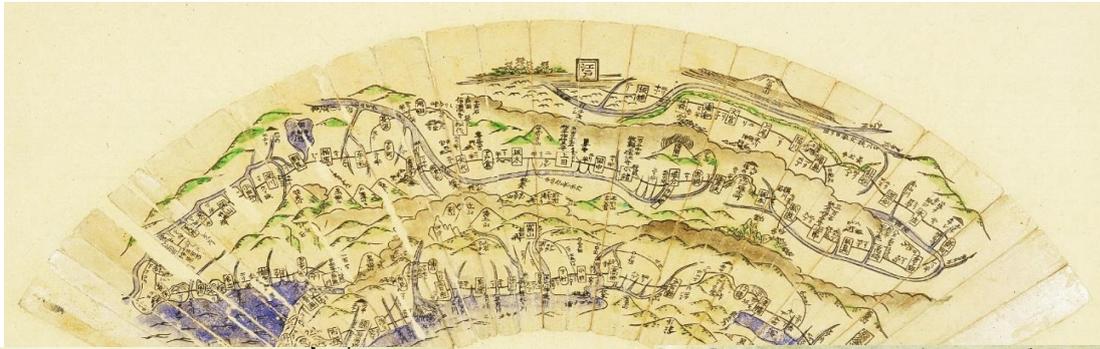


# 旅先で詠む

人持組横山家に関する寄託史料のなかには、幕末維新期に当主であった政和が旅先で詠んだ漢詩や和歌が記された史料があります。政和は文芸を好んでいたようで、当館所蔵加越能文庫にも「横山政和詠草」や「詠草七捨首」といった史料が確認できます。

政和は江戸詰のほか、富山や小松にも滞在したことがあり、さらに京都警衛のために上京もしていますので、行く先々で詠んだものと考えられます。そして、寄託史料は懐に入るような大きさに添削の跡が多く確認できることから、政和が持ち歩きながら現地で熱心に詠んだ様子がかがえます。

金沢江戸道中図扇面(富田参考品4①)



二十日愛本橋上作  
 絶壁長虹架九天  
 採藍澗水漲探淵宛然小亭畫  
 圖裡朱葢丹輿排列連  
 芭蕉の橋とてらま  
 一歩もやとやふらふら  
 一歩もやとやふらふら  
 一歩もやとやふらふら  
 一歩もやとやふらふら

栗殼嶺  
 和樹志山化鏡方憐詩  
 胆新野揚、意多苦  
 年似未必忙官老却人  
 卯の花を  
 世の中、この花を  
 一歩もやとやふらふら  
 一歩もやとやふらふら  
 一歩もやとやふらふら  
 一歩もやとやふらふら

四月三日よりの紀行(仮1253) ※愛本橋

江戸詰中雜記(仮1260) ※俱利伽羅(栗殼)嶺

金沢大坂道中図扇面(富田参考品4②)



六月朔日九谷村  
 村々に入る山里  
 尋ねつる色々の橋  
 一歩もやとやふらふら  
 一歩もやとやふらふら  
 一歩もやとやふらふら  
 一歩もやとやふらふら

平安城の山  
 旅衣いへれや  
 一歩もやとやふらふら  
 一歩もやとやふらふら  
 一歩もやとやふらふら  
 一歩もやとやふらふら

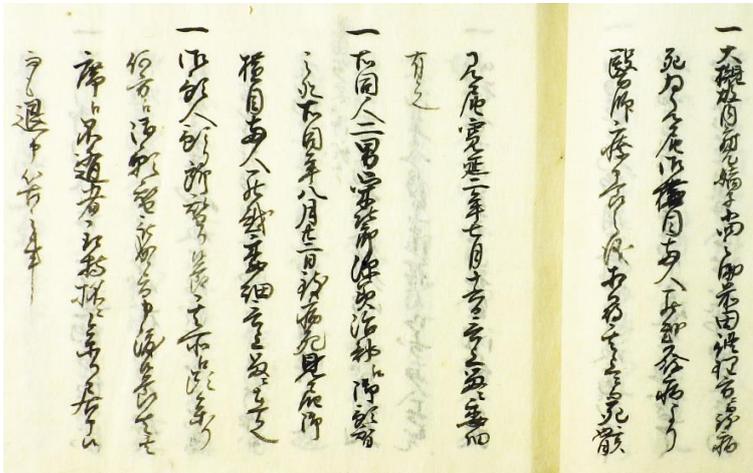
江沼郡遊覧紀行(仮1259) ※九谷村

上京紀行(仮1255) ※洛中(平安城)

# 横山左兵衛家と引馬家

寄託史料には、人持組横山家ではない横山家の史料も確認できます。横山左兵衛家は、初代長隆の子である常隆（左兵衛）の流れで、歴代当主は1000石前後の禄高で出仕しており、寄託史料では元備（義六郎）関係の史料が中心になります。また、横山引馬家は年寄衆八家の横山隆達の子である隆誨（引馬）の流れで禄高は500石、隆長・隆弘と続いて明治維新をむかえています。

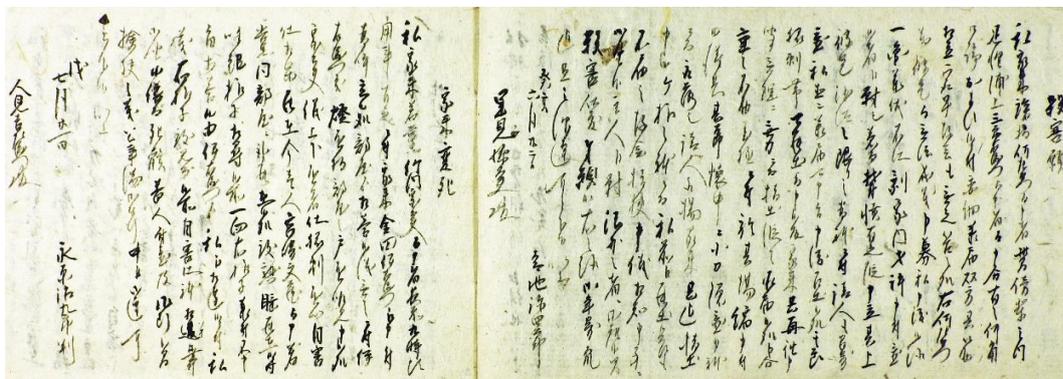
どちらの家も「先祖由緒并一類附帳」が現存しないため、歴代の経歴など詳細はわかりませんが、江戸向きの書留や職務に関わる史料が中心であることが特徴です。



## 遠慮御免并変死御預者流刑等品々集抜書 (仮1277)

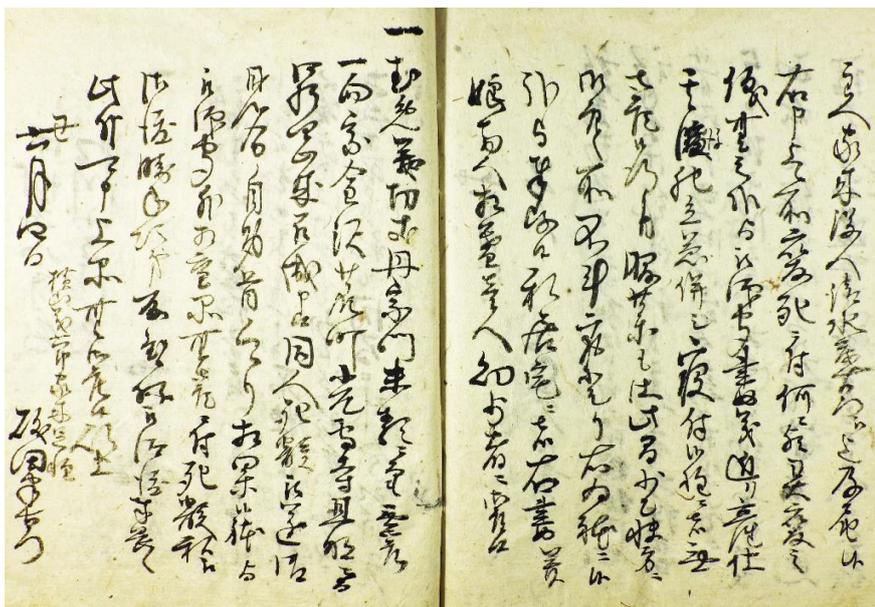
遠慮や御免、変死や御預といった処分を受けた者たちについて記された抜書。大槻尚之助は近習出頭人として頭領した大槻朝元の嫡男であったが、延享3年(1746)に朝元が失脚すると、一族として処分を受けている。

本史料では、前田修理宅において尚之助が病死したため、医師による療養などを確認した上で御横目が遺体を見届けている。また、寛延2年(1749)7月16日付の言上留に詳細が記されているとある。



## 喧嘩之御定外(仮1328)

喧嘩に関する定書のほか、出奔并立帰、手討、殺害願、家来変死、門前倒人、家来欠落といった件について、具体的な届書もしくは雛形が書き記されている。上記の里見孫大夫宛て青地弥四郎の願書は、両名の経歴および「癸亥」年から、寛保3年(1743)と推定される。



## 磯田半右衛門妻一卷(仮1463)

文化14年(1817)6月、横山義六郎の家来足軽であった磯田半右衛門の妻むめが縊死したことの届書。

第一発見者の存在、半右衛門が知るに至った経緯、その後の過程が詳細に記されている。変死ということで聞き取りがなされたことや、遺体の見分がおこなわれたことがわかり、亡くなった妻は切支丹ではないとも述べられている。

# 幕末維新期の横山政和

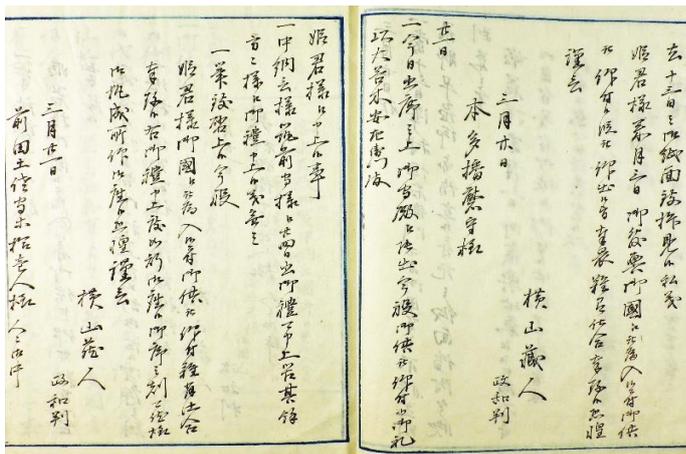
政和は天保7年(1836)に3歳で家督を相続すると、嘉永元年(1848)に額への角入と袖下留、翌2年には前髪を執り定火消役となります。同6年に家老役、翌安政元年(1854)に年寄中席御用加判を命じられたことで、本格的に藩政に関与することになった政和は、複数回の江戸詰に加え、万延元年(1860)富山詰として半年間富山に滞在し、文久3年(1863)には前田斉泰正室である溶の帰国御供、さらに長年中絶していた小松城代にも任命されています。

翌元治元年(1864)も勝手方御用や富山御用主附を勤め、藩領内外で重職に就くなか、慶応元年(1865)には京都守衛を命じられて上京し、同3年12月末には御内御用として富山に向かっています。王政復古の情報とその後の対応について本家の意向を通達したものと考えられます。

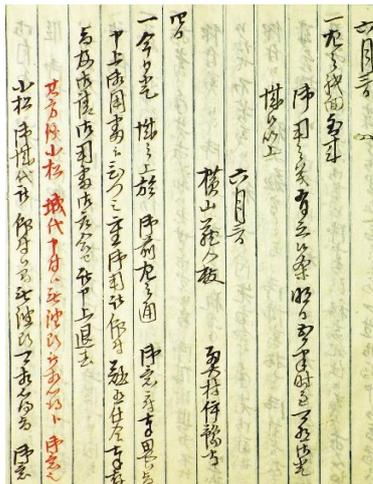
明治に入り、先代前田斉泰の上洛に随行した政和は、帰国後の明治元年(1868)末には参政、さらに執政として引き続き藩政に関与し続け、翌2年の版籍奉還後は大参事として前田直信らとともに金沢藩の舵取りを担っています。そして、同3年閏10月に一旦免除となるものの、翌4年4月に大参事に復職して廃藩置県をおかえます。

廃藩から2ヶ月後に免官となった政和は、同6年神道教導職、翌7年気多神社宮司、同15年に白山比咩神社宮司となり、さらに同16年からは前田家の旧藩史編輯引書用書籍集聚力依頼として月手当15円を前田家から受け取っていることが確認できます。おそらく、当時金沢にあった前田家用弁方で勤務したとおもわれ、前田家編輯方が史料調査として加賀・能登・越中を巡回した際には政和も同行していたと推測されます。

以上のように、幼少期に家督を相続して幕末維新期の藩政に深く関わった政和ですが、晩年には回顧録の執筆や自身が所有していた史料を前田家に献上するなど、前田家の歴史編纂事業にも大きく貢献し、明治26年8月にその生涯を終えています。



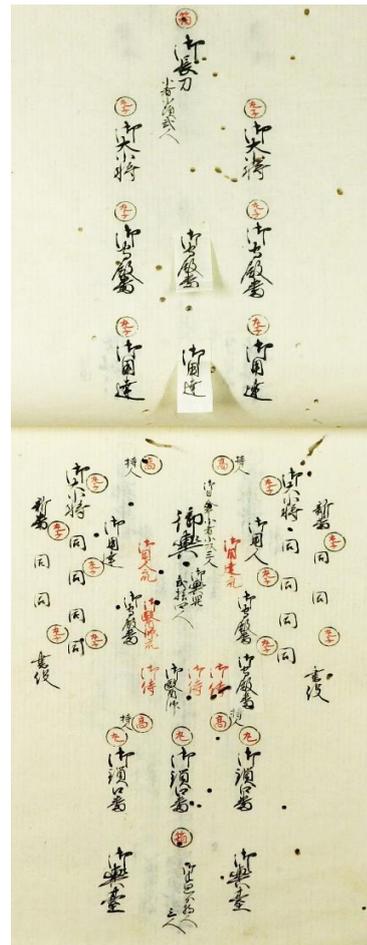
横山氏覚書(16.34-81⑨)



## 小松御城代方諸事覚(16.43-27①)

小松城代は慶長期の前田長種を初代とし、「諸頭系譜」では長種含め16名が確認できるが、明和8年(1771)に欠職となる。

文久3年(1863)年寄奥村直温の巡見後、長らく途絶えていた小松城代に政和が就任したが、それは幕末政局の中心が京都に移行したことへの対応であったとみられる。



姫君様御入国四品帳并御道中触等(16.15-107)

